

## エッセイ

## やじ馬昆虫撮影記

## (その1 飛ぶ昆虫を狙う)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

昆虫の大きな特徴として、「翅を持って飛翔できる」ことがあげられる。現在地球上で約100万種が記載されている昆虫の中でも、翅を有する昆虫の占める割合は高い。なかには生活環境に適応した結果、翅を失った(退化した)昆虫も多く見られるが、生活圏を3次元に広げることができる「飛翔」は、昆虫が生き残っていくうえでも大きな役割を果たしているに違いない。

野外に出て華麗に飛び回るチョウを見れば、その瞬間を撮りたいと思うものの、当たり前だが簡単には撮影できない。野外で飛翔している昆虫を撮影するには、①飛んでいる昆虫を静止させるため、明るい場所で高速でシャッターを切る、②複眼はもちろん、多くの部位にピントが合っている、③正面とか真横から等、その昆虫の全体像がわかるように撮影することが必要、と私は(勝手に)思っている。となると、そんなよい条件に恵まれることは極めて少ないので、当然満足できる写真はほとんどない。ヒラタアブ類はホバリングして撮りやすいので入門にお勧めだが、素早く飛ぶヤンマ類やアゲハチョウ等は、よほど運がよくなないと撮影できないだろう。しかし、いつもは敏捷な昆虫でも、雌雄の出会いではゆっくり飛んでくれることがある。

ある夏の日に大学の研究棟の屋上緑化で、昆虫を観察しているときであった。この日はガマズミについているサンゴジュハムシを数えていたが、ふと見上げるとウスバキトンボが目の前でホバリングしているではないか。急いでカメラを取り出して近づくと、あまり逃げないので60ミリのレンズで撮影することができた。1箇所にとどまりつつも位置は細かく変わるので、位置取りに苦労はしたものの、真横からの撮影ができた(図-1)。その後もホバリングしているので辺りを見ると近くの木

枝にもう1匹がとまっていた。腹部の形状からどうもこの個体はメスらしい。そして飛んでいるのはオスであった。彼らは屋上まで上がってきて、メスが休止したのでオスが自分の存在をアピールしているようであった。そこでメスも一緒に写し込んだ写真を撮ろうと、メスの方向へ動いたところ、この動きは彼らにはよくなかったようで、どちらも飛び去ってしまった。そして彼らの恋路を邪魔しつつもオスの飛翔を切り取った写真が残った。

飛ぶ昆虫と言えばチョウであるが、彼らもメスが吸蜜し、その周りをオスがせわしく飛んでいるのを見ることもある。でもそれより比較的頻繁に観察できる雌雄の追尾行動を撮影したいと思っていた。しかし観察する機会はあるにしても自分の周りですずと追いかけてくれないので、望遠レンズが欠かせないが、重くてあまり持ち歩かないからチャンスを逃してばかりである。

でも夏休みの圃場で、コムシジがゆったりと長い時間追いかけてくれたとき、やはり望遠レンズは持っていなかったが、撮影することができた。飛翔は遅かったり速かったり、さらには突然舞い上がったりと、やはりシャッターチャンスは少ない。しかし小さいながらも夏の日射しに浮かび上がる雌雄の写真を手にするのができた(図-2)。ほかのチョウでも追尾個体は多く見るものの、まだ満足する写真は得られていない。

私は自分にないものを持っている人に惹かれるようだ。楽器が弾けないので演奏している人に憧れるし、芸術家やデザイナーの作品を見て感心することが多い。そして昆虫を被写体にする写真についても、自分が持っていない能力である「飛び立つ瞬間や飛翔中の個体」を狙っている。これは私の上昇志向の表れなのか、それとも逃避願望なのか・・・定かではない。



図-1 飛翔するウスバキトンボ



図-2 コムシジの追尾飛行